《世界宗教學刊》第十四期　頁55～88 (2009)，嘉義：南華大學宗教學研究所
Journal of World Religions, no.14, pp.55~88 (2009)
Chiayi: Graduate Institute of Religious Studies, Nanhua University
ISSN: 1728-645X

《中本起經》所說之故事之傳承系統（2）
－以〈大迦葉始來品〉為主*

奧村浩基*

中文摘要

《中本起經》是非常重要之漢譯佛傳文獻之一，從來沒有人研究《中本起經》編纂者的部派背景，所屬部派只被視為不明。於是本論文主旨在於透過〈大迦葉始來品〉所說的故事內容與傳承素材，並探討〈大迦葉始來品〉的傳承部派系統。其結果，可以指出有〈大迦葉始來品〉所說的故事屬於說一切有部故事傳承的可能性。

關鍵字：　《中本起經》・〈大迦葉始來品〉・說一切有部

* 收稿日期：2009.08.14；接受刊登：2009.12.20。
* 佛光大學宗教學系所助理教授
電子郵件：hkoku@mail.fgu.edu.tw

『中本起經』における説話伝承の系統について (2) -「大迦葉始來品」を中心に-

奥村浩基

はじめに

最も早くに漢訳された仏伝文献の一つである『中本起經』は、帰属部派不明とされている[1]。このため、筆者は、『中本起經』で説かれる説話の内容や形式などを通して部派的な伝承系統を明らかにしようと考え、各品の個体研究を進めている。前回は、「佛食馬麥品」の説話構造や表現形式を手がかりにして、この品が有部の伝承、とりわけ根本有部律系の有部よりも『十誦律』や『鼻奈耶』系の有部伝承を背景に成立していることを指摘した[2]。そこで、本稿では「大迦葉始來品」(以下、「大迦葉品」と簡称する)を対象にして、本品の説話伝承系統を考察する。「大迦葉品」では、仏陀が大迦葉(Pa. Mahākassapa / Skt. Mahākāśyapa)に座の半分を譲った(半座を分かつ)ことを伝えている。これに対応する説話は、雑阿含経にも伝わっているため、先ず始めに各所伝と「大迦葉品」との関係を明らかにする。その上で仏陀が大迦葉に座の半分を譲ったという伝承素材の伝承状況から部派的伝承系統を導き出したい。これにより『中本起經』

---

(1) 平川彰『インド仏教史　上巻』、春秋社、東京、1986 年、336-337 頁、岡野潔「ラリタヴィスタラ原型の追加部分・普曜経巻八について」、『宗教研究』、第 283 号、1990 年、140 頁。

(2) 拙稿「『中本起經』における説話伝承の系統について-「佛食馬麥品」を中心に-」、『仏教学セミナー』、第 89 号、23-43 頁。

の部派的背景の一端を窺い知ることができるだろう。なお、有部という部派には、説一切有部と根本説一切有部がある。近年両派が同一の部派を指すことを文献に基づいて考察した研究も現れている[(3)]。これまでも根本説一切有部を広い意味での説一切有部に含めるのが一般的であるので、敢えていずれかの部派の文献であると指摘されている場合を除いて、本稿でも、根本説一切有部を含めて説一切有部(以下、有部と簡称する)と呼ぶことにする。それでは、先ず雑阿含経に見られる所伝から考察することにする。

1. 雑阿含経の伝える大迦葉の出家受戒伝承

インドから北の中央アジアを経て中国に伝わった初期仏教経典は中国で漢訳され、「阿含経」と呼ばれている。阿含は梵語の āgama の音写で、伝承された教えを意味する。阿含経のインド語原典は断片的な形でしか残存していないが、漢訳の阿含経は纏まった形で現存している。その主要なものが、『長阿含經』、『中阿含經』(以下、『中阿含』と簡称する)、『雑阿含經』(以下、『雑阿含』と簡称する)、『増壹阿含經』(以下『増壹阿含』と簡称する)の四部阿含経である。これらはパーリ語所伝のニカーヤと対応し、それぞれ *Dīgha-Nikāya*, *Majjhima-Nikāya*, *Saṃyutta-Nikāya*（略号：*SN*), *Aṅguttara-Nikāya* に相当する。四部阿含経はニカーヤと異なって、単一の部派によって伝

(3) 榎本文雄「「根本説一切有部」と「説一切有部」」、『印度學佛教學研究』、第 47 巻、第 1 号、392-400 頁、同氏「「根本説一切有部」の登場」、『神子上恵生教授頌寿記念論集　インド哲学仏教思想論集』、永田文昌堂、京都、2004 年、651-677 頁。榎本説の問題点を指摘する論考に八尾央「「根本説一切有部」という名称について」、『印度學佛教學研究』、第 55 巻、第 2 号、894-897 頁がある。

承されたものではなく、それぞれ伝承部派を異にしている。このうち雑阿含経には、『雑阿含』、『別譯雑阿含經』（以下、『別譯』と簡称する）、それに『雑阿含經』（以下、一巻雑阿含経と簡称する）がある。『雑阿含』は、435-436 年に中インド出身の求那跋陀羅が原典を唱え、寶雲が翻訳したものである(4)。ところが、訳出後に本来の漢訳『雑阿含』を構成していた 50 巻のうち、2 巻分が散逸したりして巻の順序が大幅に乱れることとなったが、研究によって本来の巻の順序と組織が復元されている(5)。『雑阿含』の原本の成立は、マトゥラーの教団が関与しているようで、根本説一切有部の伝承が『雑阿含』の中に認められることが明らかにされている(6)。これに対して、『別譯』は、訳者不明で、訳出年代も西秦時代（385-431 年）と推定されているに過ぎない。従来、その帰属部派は、法蔵部または化地部、あるいは古い時代の有部の所属などと推定されていた(7)。その後、

(4) 榎本文雄「『雑阿含経』の訳出と原典の由来」、『石上善應教授古稀記念論文集　仏教文化の基調と展開』、山喜房佛書林、東京、2001 年、31-32 頁。

(5) 詳しくは、水野弘元『水野弘元著作集第 1 巻　仏教文献研究 I』、春秋社、東京、1997 年、357-414 頁を参照のこと。

(6) 榎本文雄「阿含経典の成立」、『東洋学術研究』、第 23 巻第 1 号、110-111 頁、平岡聡「『雑阿含経』と説一切有部の律蔵」、『印度學佛教學研究』、第 51 巻、第 2 号、813-818 頁、Hiraoka Satoshi, “The Sectarian Affiliation of Two Chinese Saṃyuktāgamas,” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, No.49-1, 2000, pp.1-7.

(7) 水野博士は、西北インド地方で行われていた法蔵部または化地部あたりで伝えられていたもの、あるいは『雑阿含』が新しい有部としての根本説一切有部のものであるのに対して、『別訳』は俗語的梵語を使用していた古い時代の有部の所属かもしれないと推定していたが(水野前掲書、355 頁、初出「『別譯雑阿含経』について」、『印度学仏教学研究』第 18 巻第 2 号、1970 年、41-51 頁)、その後、『別訳』は、古層の有部が伝えたものであると

内容的に根本説一切有部に特有な伝承を多々示しており、また細部の組織である経の配列が『雑阿含』とほとんど一致していることから、現在は、根本説一切有部に極めて近い部派が伝えていたと考えられている[8]。一巻雑阿含経は、一巻二十七経という短い雑阿含経で、大部の雑阿含経を抄出したものと考えられている[9]。このうち、『雑阿含』や『別譯』(以下、『雑阿含』と『別譯』の両経を総称する場合、〈雑阿含経〉と簡称する)には、大迦葉が仏弟子となった時の状況を伝える経が含まれている。それは『雑阿含』第 1142 経[10]と『別譯』第 117 経[11]で(以下、この説話伝承を A 伝承と呼ぶ)、両経は共に対応関係にある。前者では、次のように叙述している。

> 如是我聞。一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園。爾時尊者摩訶迦葉。久住舍衛國阿練若床坐處。長鬚髮著弊納衣。來詣佛所。爾時世尊無數大衆圍繞説法。時諸比丘見摩訶迦葉從遠而來。見已於尊者摩訶迦葉所。起輕慢心言。此何等比丘。衣服麁陋。有儀容而來。衣服佯佯而來。爾時世尊知諸比丘心之所念。告摩訶迦葉。善來迦葉。於此半座。我今竟知。誰先出家。汝耶我耶。彼諸比丘心生恐怖。身毛皆竪並相謂言。奇哉尊者。彼尊

いう考えへと移行されている(水野前掲書、394 頁、初出「『雑阿含経』の研究と出版」、『仏教研究』第 17 巻、1988 年、国際仏教徒協会、41-51 頁)。

(8) 榎本文雄「Udānavarga 諸本と雑阿含経、別訳雑阿含経、中阿含経の部派帰属」、『印度学仏教学研究』第 28 巻第 2 号、931-933 頁、榎本「阿含経典の成立」、101-102 頁。

(9) 長崎法潤「雑阿含経解題」、『新国訳大蔵経　阿含部Ⅰ』、大蔵出版、東京、2004 年、17 頁。

(10) 大正.2, p. 302a1-b1.

(11) 大正.2,pp.417c9-419a2.

> 者摩訶迦葉大德大力。大師弟子。請以半座。爾時尊者摩訶迦葉合掌白佛言。世尊。佛是我師。我是弟子。佛告迦葉。如是如是。我爲大師。汝是弟子。汝今且坐。隨其所安。尊者摩訶迦葉稽首佛足。退坐一面。爾時世尊復欲警悟諸比丘。復以尊者摩訶迦葉同己所得殊勝廣大功德。爲現衆故告諸比丘[12]。

これによれば、大迦葉は大衆の前で仏陀に「世尊よ、仏はわが師です。私は弟子です[13]」と語って、自分が仏陀の弟子であることを表明し、仏陀も「私は大師となり、あなたは弟子です[14]」と答えて、彼を弟子として受け入れている。こうした大迦葉の表明は、大迦葉の受戒と見なされ、これによって大迦葉は比丘になったと考えられている。有部系の律文献である『薩婆多毘尼毘婆沙』(以下、『毘尼毘婆沙』と簡称する)は、「七種得戒法」の中で次のように説明する。

> 次大迦葉來詣佛所言。佛是我師我是弟子。世尊修伽陀是我師。我是弟子。是名自誓受戒。…(中略)…自誓唯大迦葉一人得。更無得者[15]。

ここで「自誓受戒」と呼ばれている大迦葉の受戒法は、説一切有部の『十誦律』でも「長老摩訶迦葉自誓即得具足戒[16]。」と説かれ、『薩婆多部毘尼摩得勒伽』の挙げる「自誓得[17]」に相当する。また説一切有部の論書でも、毘奈耶毘婆沙師たちの所説として彼の受戒

---

(12) 大正.2, p. 302a1-18.
(13) 大正.2, p. 302a12-13.
(14) 大正.2, p. 302a14.
(15) 大正.23, p. 511a18-b4.
(16) 大正.23, p. 410a8-9.
(17) 大正.23, p. 594a20-21.：五自誓得。謂摩訶迦葉及三説。

を伝えている。『阿毘達磨順正理論』(以下、『順正理論』と簡称する)によれば、

> 諸毘奈耶毘婆沙師説。有十種得具戒法。爲攝彼故復説等言。何者爲十。一由自然謂佛獨覺自然。謂智以不從師證此智時得具足戒。二由佛命善來苾芻。謂耶舍等由本願力佛威加故。三由得入正性離生。謂五苾芻由證見道得具足戒。四由信受佛爲大師謂大迦葉。五由善巧酬答所問謂蘇陀夷。六由敬受八尊重法謂大生主。七由遣使謂法授尼。八由持律爲第五人謂於邊國。九由十衆謂於中國。十由三説歸佛法僧[18]。

とあり、『倶舎論(*Abhidharmakoṣa-bhāsya*)』でも同様に「大迦葉におけるが如く、師を信受するによる(śāsturabhyupagamān Mahākāśyapasya)[19]」とある。これらの所述は、まさに先に見た表明が受戒であることを示している。

この伝承では、大迦葉が出家弟子となる際、仏陀が彼に極めて特異な行動をとったことを伝えている。それは、初めてやって来たばかりの彼に仏陀自ら座の半分を譲って、そこへ座るよう勧めたことである。仏陀がこうした行動をとった理由は、経が示すように、比丘たちが大迦葉の外見を見て軽慢心を起こしたため、それを戒め悟らせるために行われた。こうした行動の背景には、仏陀が大迦葉の備える功徳を知っていたからである。『雑阿含』は先掲の経文に続いて、その功徳の内容を説き示している。

---

(18) 大正.29, pp. 551a29-b9.

(19) *Abhidharma-koṣa-bhāsya of Vasubandhu*, ed, by Pradhan, Patna, K. P. Jayaswal Research Institute, 1967, p.212,6,大正.29, pp.74b29. : 四由信受佛爲大師。謂大迦葉。

我離欲惡不善法。有覺有觀。初禪具足住。若日若夜。若日夜。摩訶迦葉亦復如我。離欲惡不善法。乃至初禪具足住。若日若夜若日夜。我欲第二第三第四禪具足住。若日若夜若日夜。彼摩訶迦葉亦復如是。乃至第四禪具足住。若日若夜若日夜。摩訶迦葉亦復如我。離欲惡不善法。乃至初禪具足住。若日若夜若日夜。我欲第二第三第四禪具足住。若日若夜若日夜。彼摩訶迦葉亦復如是。乃至第四禪具足住。若日若夜若日夜。我隨所欲。慈悲喜捨。空入處。識入處。無所有入處。非想非非想入處。神通境界。天耳他心智。宿命智。生死智。漏盡智具足住。若日若夜若日夜。彼迦葉比丘亦復如是。乃至漏盡智具足住。若日若夜若日夜[20]。

これに対応する叙述は、『別譯』にも見られる[21]。いずれの経も、大迦葉が仏陀の出家弟子となる以前に仏陀と同じく四禅、四無量心、四無色定、六神通を備えており、色界と無色界の禅定全てに到達していたとする。彼がすでに出家生活を過ごしていたことは、〈雑阿含経〉が明らかにしている。特に『別譯』では、『雑阿含』が「我今竟知。誰先出家。汝耶我耶。」と語るのを「我當思惟。汝先出家。我後出家[22]。」と説いて、大迦葉が仏陀より先に出家していたことを仏陀の口を通して明らかにしている。但し、『別譯』の所説は、根本説一切有部が伝えた『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』(以下、『有部尼毘奈耶』と簡称する)の所説と符合しない。この律では、

爾時菩薩遍觀一切老病死已。諸天圍繞。便於夜半踰城出家往

(20) 大正.2, p. 302a18-28.
(21) 大正.2,pp.416c24-417a20.
(22) 大正.2,pp.416c15-16.

勤苦林。時迦攝波亦於此時。棄捨家業修出離行。作如是念若於世間是阿羅漢者。我當依彼敬心承事。既出家已。時人號爲隱士。迦攝波住多子制底邊。是時菩薩住阿蘭若。於六年中修苦行已。知是無益徒爲勞倦。次於歡喜歡喜力二牧牛女處[23]。

と説いて、大迦葉は仏陀と同時期に出家していたとしている。この点では、根本説一切有部に極めて近い部派が伝えていたと考えられている『別譯』は、その部派の説と異にしていることになる。

ところが、この伝承とは別に『雜阿含』第 1144 経[24]と『別譯』第 119 経[25](以下、この説話伝承を B 伝承と呼ぶ)でも大迦葉の出家受戒について言及している。第 1144 経によれば、髭と髪を剃り、袈裟衣を身に纏っていた大迦葉は、王舍城の那羅聚落の中間にある多子塔所[26]で仏陀に出会ったという。その時、仏陀の姿は、「正身端坐。相好奇特。諸根寂静。第一息滅。猶如金山[27]。」であったと形容する。それを見た大迦葉は、この方こそわが師であり、世尊であり、羅漢であり、等正覚であると思って、仏陀に「是我大師，我是弟子[28]」と申し上げると、仏陀も「迦葉。我是汝師。汝是弟子[29]」と答えられた。そして仏陀は、彼が今や真実の浄心を成就している

(23) 大正.23, p.911a2-9.
(24) 大正.2,pp.302c13-303c23.
(25) 大正.2,pp.417c9-419a2.
(26)「多子塔所」は、多子、多子野澤、子兜婆などと漢訳されているもので、梵語の Bahuputraka caitya, パーリ語の Bahuputta cetiya, Bahuputtaka cetiya に対応する訳語である。
(27) 大正.2,pp.303b2-3.
(28) 大正.2,p.303b6.
(29) 大正.2,p.303b7.

として法を説かれる。大迦葉は、その後仏陀に付き従って仏陀の住処に行った。大迦葉は、百千金の価値のある衣で作った僧伽梨を四つ折りにして仏陀の座所をこしらえ、そこへ座わられるよう願った。仏陀は座わり手でそれに触れられると、「迦葉。此衣輕細。此衣柔軟[30]。」と言われた。大迦葉は、仏陀がそれを受納されるよう申し出ると、仏陀は自らの糞掃衣を与えられた。大迦葉は、それから第 9 日目に無学を起こしたという。この所伝は、大迦葉が低舎比丘尼から「本外道」と非難されたことに対する弁明として説かれた形をとっている。しかし、ここでは、仏陀が大迦葉に座の半分を譲ったことについては全く触れられていない。その代わりに仏陀と大迦葉が衣を交換したことが説かれている。所伝全体の内容を見ても、B 伝承は出家した地点さえも異にしており、あたかも別人の出家譚を伝えているようである。唯一対応する記事は、両者の対話のみである。現存する文献を広く博捜しても、仏陀から座の半分を譲られた弟子は、唯一彼だけであるにもかかわらず、B 伝承での大迦葉は、それについて言及しないのである。

こうした B 伝承は、雑阿含経に対応する *SN* でも伝えられているものの[31]、A 伝承は見い出されない。パーリ語所伝の場合、他のニカーヤにも含まれていないことから、上座部大寺派では、A 伝承は伝えられなかったか、あるいは知られていなかったものと考えられる。実際、A 伝承に対応する所伝は、この他に『中本起經』にのみ伝えられているに過ぎない。そこで次に『中本起經』の所伝を確認

---

(30) 大正.2,p.303b25-26.

(31) *Saṃyutta-Nikāya*, vol.ii, ed. by G.A.Somaratne, the Pali Text Society, London, 1984, pp.217,24-222,11.

したい。

2.『中本起經』の伝える A 伝承

『中本起經』に見られる対応説話は、「大迦葉品」に説かれている。しかし、「大迦葉品」の所説は、A 伝承に対応する説話だけで成り立っているのではなく、それに加えて過去世での出来事を挙げて、仏陀が大迦葉に座の半分を譲られた理由を説き明かしている。即ち、大迦葉が現在世で座の半分を譲られたという行為が、過去世で起こった特定の出来事に結びつけられて説明されているのである。その際、現在世の人物と過去世の主人公や脇役とが結びつけられている。よって、「大迦葉品」は、A 伝承に対応する説話を現在世の出来事を語る「現在物語」として用い、それに過去世の出来事を語る「過去物語」と、現在物語の人物と過去物語の主人公や脇役とを結びつける「連結」を付加して成り立っていることになる。こうした三つの構成要素を備えた説話は、「ジャータカ(jātaka)」や「アヴァダーナ(avadāna)」に見られる基本的な形式である。内容的に見て、現在物語が説話全体の大半を占めている点、また大迦葉が、過去世に起こした所作が現在世に果報として現れたことを説明した業報物語となっている点では、アヴァダーナ説話としての要素を備えたものとなっている。ただ完成形のアヴァダーナ説話に見られるとされる特徴の多くは備わっていない[32]。なお、仏陀を中心にこの説話を読めば、

---

[32] 岩本裕博士によれば、①現在物語、②業の威力を讃える詩頌、③過去物語、④過去仏の登場、⑤業に関する教説の五項目を備えた形が、完成形のアヴァダーナに見られる形式とされる(『改訂増補　佛教説話研究序説』、佛教説話研究第 1 巻、開明書院、東京、1978 年、29-30 頁)。また博士は、アヴァダーナの内容的な特徴として①現在物語の主人公は仏弟子か敬虔な

それは因果応報を示す業報物語とはならない。仏陀が彼に座の半分を譲ったのは、「往昔天帝。以生死畏座令吾並坐。吾今以無上正眞法御之座。報昔功德[33]。」と語るように、過去世に大迦葉から受けた行為に対する報恩として行われたことになる。このため、単に三つの構成要素を備えた形の報恩物語となり、ジャータカやアヴァダーナとは見なし難くなる。

現在物語として用いられている A 伝承を見ると、その説話の結構は、基本的に〈雑阿含経〉と対応している。前掲の『雑阿含』に対応する部分を示せば、次のように説かれている。

> 爾時世尊在舍衛國祇樹給孤獨園。爲衆説法。天龍鬼神四輩弟子。嚴整具足。於是摩訶迦葉。垂髪弊衣。始來詣佛。世尊遙見歎言善來迦葉。豫分半床。命令就坐。迦葉進前。頭面作禮。退跪自陳曰。余是如來末行弟子。顧命分坐。不敢承旨。大衆僉念。此老道士。有何異德。乃令世尊分坐命之。此人儁又。唯佛明焉。於是如來察衆所念。欲決所疑。廣論迦葉大行齊聖[34]。

信者である、②過去物語に登場する過去仏は、過去七仏のいずれかである。特にヴィパシインかカーシヤパである、③仏陀は過去物語の登場人物とは結びつけられない、④アヴァダーナでは現在物語が重要である。ジャータカではそれが短く、アヴァダーナの場合ほど重要ではないと指摘する(同書、26-43 頁)。但し、このうち、①は必ずしもそう限定されるものでなく、アヴァダーナの主人公にも仏陀の前世としての菩薩が登場することが指摘されている(松村恒「聖典分類形式としてのアヴァダーナの語義」、『今西順吉教授還暦記念論集　インド思想と仏教文化』、春秋社、東京、1996 年、683-685 頁)。

(33) 大正.4, p. 161b17-18.

(34) 大正.4, p.161a18-26.

「大迦葉品」では、この後〈雑阿含経〉と同様、仏陀と大迦葉が等しく備える功徳を説明しているので、三者は共に

① 舎衛国の祇樹給孤独園を機縁地とする。

② 仏陀が大衆に説法している時に大迦葉が初めて訪ねてくる。

③ その時、彼が髪や髭を伸ばし、粗末な衣を着ていたという外装に言及する。

④ 仏陀自ら座の半分を彼に譲り、そこへ座るよう命じる。

⑤ 大迦葉は大衆の面前で仏陀に仏陀の弟子であることを語る。

⑥ 仏陀は、自分と大迦葉が修道実践上における同等の功徳を備えていることを比丘たちに語り、その徳目を具体的に挙げて説明する。

といった説話要素から成り立っているといえる。但し、「大迦葉品」と〈雑阿含経〉では相違する点もある。先ず〈雑阿含経〉では、仏陀が大迦葉に譲った席へ座るよう勧めた後、仏陀は彼に自分と大迦葉のどちらが先に出家したのかについて言及したり、大迦葉の表明を受けて、仏陀が自分が大迦葉の師であり、大迦葉は弟子であると答えたりしているが、そうした両者の対話は、「大迦葉品」では全く見られない。このため、「大迦葉品」は、〈雑阿含経〉よりも簡述傾向にある。また「大迦葉品」は、仏陀が大迦葉に座の半分を譲られた理由を説き明かす説話となっているので、仏陀は大迦葉を見るや、自発的に座の半分を譲っている。このため、比丘たちの態度や行動には、全く触れられていない。そして比丘たちの疑念を受けて座を分かった理由を 2 つの点から説き明かしている。それは、仏陀と大迦葉が等しく備える功徳と過去世での出来事の点からである。しか

し、〈雑阿含経〉の場合、弟子たちが大迦葉を軽視したため、それを戒め諭す形で座の半分を譲ったことになっている。このため、両者が等しく備える功徳を説き明かすのも、弟子たちの態度を戒め諭すため、また両者の功徳を大衆に示すために説かれることになっている。その功徳の内容も、『雑阿含』では、初禅、二禅、三禅、四禅の四禅、慈悲喜捨の四無量心、空入處、識入處、無所有入處、非想非非想入處の四無色定、神通境界、天耳、他心智、宿命智、生死智、漏盡智の六神通を説く。『別譯』でも、初禅、二禅、三禅、四禅、慈悲喜捨、入無邊虚空、識處、不用處、非想非非想處の四無色定の他、六神通を説く点は一致している。但し、六神通の配列内容は、『雑阿含』と若干相違が見られ、神通、天眼、天耳、他心智、宿命、漏盡となっている[35]。これに対して、「大迦葉品」では、四禅、大慈、大悲、四禅三昧、すなわち、無形三昧、無量意三昧、清淨積三昧、不退轉三昧の 4 種、そして四神足念(神足通)、悉知一切人意(他心通)、耳徹聽(天耳通)、見衆生本(宿明通)、知衆生所趣行(天眼通)、諸漏皆盡(漏盡通)の六神通、解定、智定、慧定、戒定の四定を挙げて、〈雑阿含経〉とは対応しない功徳や六神通の配列を伝える[36]。なお、両者が等しい功徳を備えているという所説は、*SN* と『佛本行集經』[37]

---

[35] 大正.2, pp.416c24-417a20.

[36] 大正.4, p.161a26-b11.

[37] 平川彰博士は、この経を法蔵部所属と想定するが(『初期大乗仏教の研究 I』、平川彰著作集第 3 巻、春秋社、東京、1997 年、269-270 頁)、水野弘元博士、岡野潔博士は、共に中国で編纂された仏伝である可能性を指摘されている(水野弘元『水野弘元著作集第 1 巻　仏教文献研究 I』、春秋社、東京、1997 年、297-298 頁、岡野潔「ブッダチャリタの改作仏伝について―仏本行集経と方広大荘厳経に用いられた未知の仏伝」、『東北大学印度学講座

でも見られる。*SN* では、四禅、四無色定、六神通の 3 種で、四無量心がない代わりに四無色定の後に想受滅が説かれる[38]。『佛本行集經』では、四禅、四無量心、四無色定、六神通を説くが、四無色定の後に八解脱行、八勝處行、十一切處行を加えている[39]。両者の六神通の配列は、『雑阿含』と対応している。*SN* の場合、この所説だけで単経が成り立っており、『佛本行集經』は、B 伝承に後続して説かれている。このため、この所説は元来独立した説話素材であったと思われる。

こうした点を踏まえると、「大迦葉品」の現在物語は、〈雑阿含経〉の伝承に基づいて成立したのではないものの、起源的に同一の伝承源に基づいて成立した説話伝承であることは間違いない。

また現在物語は、「大迦葉品」の説話全体の大半を占めているため、過去物語と連結部分は、極めて簡潔なものとなっている。

> 世尊又曰。過去久遠。時有聖王。名文陀竭。高行暉世。功勳感動。忉利天帝。欽其異德。即遣車馬。詣闕迎王。王乘天車。忽然升虛。天帝出迎。與王共坐。娛樂盡歡。送王還宮。佛告比丘。爾時天帝者。大迦葉是也。文陀竭王者則是吾身[40]。

これによれば、転輪聖王である文陀竭[41]が迎えられて天に昇り、

六十五周年記念論集　インド思想における人間観』、平楽寺書店、京都、1991 年、69 頁)。

[38] *SN*,vol.ii, pp.210,24-214,24.

[39] 大正.4, pp.867a4-877a25.

[40] 大正.4, p.161b11-17.

[41]「文陀竭」は、梵語の Māndhātṛ, パーリ語の Mandhātar に対応する音訳である。

帝釈天から座の半分を譲られたことを語るものとなっている。そして過去世の帝釈天が今の大迦葉であり、過去世の文陀竭が今の仏陀であるという。帝釈天が文陀竭王に座の半分を譲ったという説話は、*Bhaiṣajya-vastu* (略号 ：*Bhaiṣ-Va*), *Divyāvadāna*（略号 ：*Divy*),『中阿含』、『増壹阿含』、『佛説頂生王因縁經』、『佛説頂生王故事經』、『佛説文陀竭王經』、『六度集經』、『賢愚經』、『大寶積經』、『父子合集經』、『佛所行讃』、『佛本行集經』（以下、『集經』と簡称する）、『大般涅槃經』（40 巻本）、『大般涅槃經』（36 巻本）、『根本説一切有部毘奈耶藥事』（以下、『有部藥事』と簡称する）、『座禪三昧經』、『正法念處經』、『大智度論』、『鞞婆沙論』[42]などに広く求めることができる。但し、これらの説話では、文陀竭王自らが天界に赴いたとする点で「大迦葉品」と異なっている。帝釈天

---

[42] *Gilgit Manuscripts*, vol.iii, part. 1, Bibliotheca Indo-Buddhica No.16, ed. by Dr. Nalinaksha Dutt Ph. D., Sri Satguru Publications, Delhi, 1984, p.95, *The Divyāvadāna : a collection of early Buddhist legends*, by E.B. Cowell and R.A. Neil, Cambridge University Press, 1886, pp.200,21-228,20,『中阿含』、大正.1, pp.494b10-496a13,『増壹阿含』、大正.2, pp.584b15-584c10,『佛説頂生王因縁經』、大正. 3, p.403a19-b3 etc, 『佛説頂生王故事經』、大正.1, pp.822b12-824a15, 『佛説文陀竭王經』、大正.1, pp.824a20-825a14,『六度集經』、大正.3, pp.21c9-22b15, 『賢愚經』、大正. 4, pp.439b26-440c15,『大寶積經』、大正.11, p.427b9-13, 429a13-16, 430c3-7,『父子合集經』、大正. 11, p.972c1-5, 973c1-4, 974b21-27. なお、『大乗集菩薩學論』(大正.32,p.125b14-21)は、この経を引用する形でこの話を伝えている。『佛所行讃』、大正. 4,p.20a9-10,c6-8, 『佛本行集經』、大正. 3, p.670b2-3 etc,『大般涅槃經』、大正. 12, p.439a4-5, 『大般涅槃經』、大正. 12, p.680b24-26,『根本説一切有部毘奈耶藥事』、大正. 24, p.56b29-57a15,『座禪三昧經』、大正. 15,p.270a10, p.277b20,『正法念處經』、大正. 17,p.164a2-b7,『大智度論』、大正. 25,p.172c3-6,『鞞婆沙論』、大正.28,p.482a7-9.

から遣わされた車馬に乗って天界に赴き、座の半分を譲られたとする点は、むしろ別の転輪聖王の説話に見られる形である。それは、*Bhaiṣ-Va,*『増壹阿含』、『有部藥事』、『大寶積經』、『父子合集經』、『六度集經』[43]などに伝わるニミ王の説話に近い。よって、過去物語は、文陀竭王の名を用いたニミ王型説話となっているといえるだろう。現存する文献を見る限り、これに対応する説話は見当たらず、「大迦葉品」固有の説話伝承となっている。

〈雑阿含経〉の場合、その所説が独立して単経として伝わっていたため、そこで説かれる大迦葉の出家が、仏陀の生涯の中でいつ頃に起こった事跡として捉えられているのかを示すことはなかった。しかし、『中本起經』では、各品が時系列的に結合されて配列されているので、「大迦葉品」の事跡が、時間的に特定化されている。「大迦葉品」に至る品の配列を見ると、次のようになっている。

【1】成道後の初転法輪と五比丘の出家 （「 轉法輪品」）

【2】ヤサとその友人たちの出家 （「現變品」）

【3】カサッパ三兄弟とその弟子たちの出家 （「化迦葉品」）

【4】ビンビサーラ王に対する説法 （「度瓶沙王品」）

【5】舍利弗や目連の出家 （「 舍利弗大目揵連來學品」）

【6】仏陀の帰郷 （「還至父國品」）

【7】スダッタ長者の祇園精舍奉献 （「須達品」）

---

[43] *Bhaiṣ-Va, Gilgit Manuscripts,* vol.iii, part. 1, p.112,『増壹阿含』、大正.2, pp.806c21-810b19, 『有部藥事』、大正.24, pp.58c14-59a11, 『大寶積經』、大正.11, p.431c17-432c15,『父子合集經』、大正.11, pp.975b9-976a9,『六度集經』、大正.3, pp.48b26-49b23.

【8】ウダーナ王の帰信　（「本起該容品」）

【9】養母マハーパジャパティー・ゴータミーの出家　（「瞿曇彌來作比丘尼品」）

【10】波斯匿王に対する説法　（「度波斯匿王品」）

【11】波斯匿王に対する説法　（「自愛品」）

【12】大迦葉の出家　（「大迦葉品」）

このように舎利弗や目連の出家を経て、波斯匿王への説法の後に大迦葉の出家があったと捉えている。これに対して、*Mahākaṇha-jātaka* は、大迦葉の出家を三迦葉の出家の後と捉えている。

> 最上等正覚に到達されると、自ら衣をつけ鉢を持って十八ヨージャナーの道のりを行き、五人組の長老たちに法輪を転じられてから、…(中略)…ウルヴェーラに行かれて、結髪行者に三千五百の奇跡を示し、出家させ、ガヤーシーサ山に留まらせ、「燃える火の教え」を説いて千人の結髪たちに阿羅漢果を与えられた。また三ガーワタ[の道のり]を会いに行って、大迦葉に三つの教誡でもって具足戒を授けられた[44]。

---

[44] *The Jātaka*, vol.iv, ed. by V.Fausböll, the Pali Text Society, Oxford, 1991, p.180,12-18. : paramābhisambodhiṃ patvā sayaṃ pattacīvaram ādāya aṭṭhārasayojanamaggaṃ gantvā pañcavaggiyatherānaṃ dhammacakkaṃ pavattetvā…Uruvelaṃ gantvā jaṭilānaṃ aḍḍhuḍḍhāni pāṭikāriyasahassāni dassetvā pabbājetvā Gayāsīse ādittapariyāyaṃ kathetvā jaṭilasahassassa arahattaṃ adāsi, Mahākassapassa tīṇi gāvutāni paccuggamanaṃ gantvā tīhi ovādehi upasampadaṃ adāsi.

これをパーリ律の「大犍度(*Mahākkhandhaka*)」に見られる仏伝的記事に照らして見ると、三迦葉の出家は、舎利弗や目連の出家以前に当たる[45]。『集經』の説もこれに似て、大迦葉の出家を三迦葉と舎利弗らの出家の間に置いている[46]。しかし、『四分律』、『彌沙塞部和醯五分律』(以下、『五分律』と簡称する)の受戒犍度でも、最初の仏弟子となった五比丘から舎利弗たちまでの出家受戒を説いているが、パーリ律と同様、その間には大迦葉の名は登場しない[47]。これに対して、大衆部所伝の『摩訶僧祇律』は、善来受戒を受けた者の一人に大迦葉の名を挙げる。

> 佛告舍利弗。如來所度阿若憍陳如等五人。善來出家善受具足。共一戒一竟一住一食一學一説。次度滿慈子等三十人。次度波羅奈城善勝子。次度優樓頻螺迦葉五百人。次度那提迦葉三百人。次度伽耶迦葉二百人。次度優波斯那等二百五十人。次度汝大目連各二百五十人。次度摩訶迦葉闡陀迦留陀夷優波離次度釋種子五百人。次度跋度帝五百人。次度群賊五百人。次度長者子善來。如是等如來所度善來比丘出家善受具足[48]。

これによれば、大迦葉の出家は、舎利弗らの出家以後と捉えていることになる。『過去現在因縁經』(以下、『因縁經』と簡称する)、『佛所行讃』、『佛本行經』も同様に捉えている[49]。このように大迦

---

[45] *The Vinaya piṭakaṃ,* vol. i, ed. by Hermann Oldenberg, the Pali Text Society, London, 1969, pp. 24,10-35,14.
[46] 大正.3.pp.861c4-870b25.
[47] 『四分律』、大正.22, pp.793b16-797b2,『五分律』、大正.22, pp.108b5-109b22.
[48] 大正.22, pp.412c20-413a1.
[49] 『因縁經』、大正.3.p.653a4-b11, 『佛所行讃』、大正.4, pp.33a18-34b5,『佛

葉の出家が、舎利弗らの出家以後であると伝える点は、『中本起經』と共通するものの、さらに『中本起經』の所説と類似するのは、『有部尼毘奈耶』である。これによれば、

> 即便往詣菩提樹下。於金剛座自敷草座。結跏趺坐端身正念如睡龍王。以慈悲仗降彼三十六億天魔兵衆。證無上覺。次往婆羅疤斯國仙人墮處施鹿林中。爲五苾芻及以隨五。…(中略)…并留髻外道一千人等。並令歸佛出家近圓。頻婆娑羅王亦住見諦。次詣王舍城住竹林園。度大目連及舍利子。次往室羅伐城。爲勝光王説少年經令其調伏。次爲勝鬘夫人毘盧將軍及仙授等。咸令見諦。…(中略)…爾時世尊作如是念。隱士迦攝波今應受化。即往佛栗氏國。人間遊行。到廣嚴城多子塔邊。在樹下座。爲欲引導迦攝波故。擧身光照如妙金山[50]。

とあり、全体的に『中本起經』とほぼ共通し、中でも舎利弗と大迦葉の出家との間に勝光王、すなわち波斯匿王らへの教化があったことを説く点は、両者でのみ一致している。このため、『中本起經』は、有部の仏伝伝承と何らかの関係があるのではないだろうか。

3. 伝承素材と部派的傾向

これまで〈雑阿含経〉と「大迦葉品」の所伝を対比検討して、三者が起源的に同一の伝承源から生じた説話から成り立っていることを見い出した。このうち、目下帰属部派が確定していない『中本起經』を除いて A 伝承の伝承範囲を考えると、少なくとも有部とそれと極めて近い部派で伝承されており、*SN* を伝える上座部大寺派では

本行經』大正.4,p.81c4-13.

(50) 大正.23,p.911a10-b11.

伝承されていなかったことがわかる。このため、現存する文献から見る限り、上座部系部派内でも限られた部派でのみ伝えられていた説話伝承であったと推測される。このことは、B 伝承の伝承状況と比べると極めて対照的である。B 伝承の場合、〈雑阿含経〉と *SN* だけでなく、*SN* の註釈文献である *Sāratthappakāsinī*,大衆部系統の説世間部が伝えた *Mahāvastu* (略号 ： *MV*),根本説一切有部の『有部尼毘奈耶』、『集經』などにも伝わっており[51]、また『因果經』、『佛所行讃』、『佛本行經』[52]では、大迦葉の出家地を B 伝承の伝える多子塔としていることから、その伝承範囲は、上座部、大衆部を始め、相当広い範囲で伝わっていたことになる。

次に、大迦葉が仏陀から座の半分を譲られたという伝承素材から伝承範囲を考えると、やはり有部、もしくは有部系統とされる文献に集中して説かれている。先ず『雑阿含』第 1143 経では、次のように説かれている。

> 如是阿難。世尊如來應等正覺。於無量大衆中。口自説言。善來摩訶迦葉。請汝半座。復於大衆中。以同己廣大功德。離欲

---

(51) *Saṃyutta-Nikāya Commentary*, vol.ii, ed. by F.L. Woodward, the Pali Text Society, London, 1977, pp.181,3-183,16, *MV, Le Mahāvastu*, vol.iii, ed.by É. Senart, Meicho Fukyu–kai, Tokyo, 1977, pp.50,16-56,4, 『有部尼毘奈耶』、大正.23, pp.911b13-912a3,『集經』大正.3, p.866a16-c28.これらの所伝のうち、*SN*, *MV*,『集經』は、衣の交換を大迦葉に智が生じた後の出来事として説いているのに対し、『雑阿含』、『別譯雑』、『有部尼毘奈耶』は、智が生じる前に衣の交換が行われたとする。

(52) 『因縁經』、大正.3.p.653a27, 『佛所行讃』、大正.4, p.33c25,『佛本行經』大正.4,p.81c6.

> 惡不善法。乃至漏盡通。稱歎摩訶迦葉耶。阿難答言。如是尊者摩訶迦葉[53]。

この経はA伝承に後続して収められている経であるが、ここでも、大迦葉自らが阿難に仏陀から座を譲られたことを述べている。これに対応する経は、*SN*や『別譯』第118経にも見られるが、座の半分を譲られたことは言及していない[54]。

次いで有部の所伝とされる*Divy*によれば、

> ウパグプタ長老は、「大迦葉のストゥーパを敬ってください」と[言った]。[アショーカ]王は言った。「彼にはどのような徳があったのですか」。長老は言われた。「彼は実に偉大で少欲で満足して『頭陀行者である者たちの第一人者である』と示され、世尊から半座を提供されました。」[55]

とある。ここでは、ウパグプタ(Upagupta)長老がアショーカ王に大迦葉の徳を讃嘆している[56]。ここで登場するウパグプタ長老は、有部系の比丘であることが指摘されている[57]。*Divy*に対応する所伝は、『雑阿含』第604経、『阿育王經』、『阿育王傳』にも見られる[58]。『阿

---

(53) 大正.2, p. 302c7-11.

(54) *SN*, vol.ii.pp.217,24-222,11,『別譯』、大正.2, p.417a23-c8.

(55) *The Divyāvadāna*, p.395,21-24. : yāvat sthaviropaguptaḥ sthaviramahākāśyapasya stūpaṃ kriyatām asyārcanam iti. rājāha. ke tasya guṇā babhūvuḥ. sthavira uvāca. sa hi mahātmā alpecchānāṃ saṃtuṣṭānāṃ dhūtaguṇavādinām agro nirdiṣṭo bhagavatārdhśāsanenopanimantritaḥ…

(56) 大正.2, p.168a11-14.

(57) 平岡聡『説話の考古学 インド仏教説話に秘められた思想』、大蔵出版、東京、2002年、219, 222-223頁。

(58) 『雑阿含』、大正.2, p.168a11-14,『阿育王經』、大正.50, p.138b18-21,『阿

育王經』と『阿育王傳』の伝える付法相承は、根本説一切有部律の説に近いとされており、有部と関係のある文献である[59]。

Sumāgadhāvadāna(略号 ：*Sum-A*)は、祇園精舎を寄進したスダッタ長者の娘であるスマーガターにまつわる説話を伝える。彼女は仏陀と弟子たちを家に招いた時、夫に大迦葉の徳を次のように紹介する。

> 彼女は答えた。「いいえ、この方は聖大迦葉です。世尊は、この方を小欲知足の頭陀行者たちの第一人者であると宣言されました。…(中略)…さらにまた、全ての声聞たちの眼前で、この方は世尊から座の半分を提供されました。」[60]

これに対応する部分は、『増壹阿含』、『須摩提女經』、『佛説給孤長者女得度因縁經』の伝えるスマーガター伝説にも見られる[61]。岩本裕博士によれば、*Sum-A* は有部所伝とされ、こうしたスマーガター伝説は、説一切有部の内部で成立したことは疑いえないという。またこの伝説が、西暦 2・3 世紀頃にガンダーラ地方で知られていたことが、シクリ遺跡に見られる浮彫から知られるという。その当時の

育王傳』、大正.50, p.104b.18-21.

[59] 静谷正雄『小乗仏教史の研究』、百華苑、京都、1978 年、145-156 頁、松村恒・松村淳子「アショーカ王伝の構成と材源」、『神戸国際大学紀要』、第 47 号、29-35 頁。

[60] 岩本裕『スマーガター＝アヴァダーナ研究』、佛教説話研究第 5 巻、開明書院、東京、1979 年、付録 I の通し番号 61-63,頁数不記載。: sā kathayati : nāyam āryo Mahākāśyapo, ’yaṃ Bhagavatā alpecchānāṃ saṃtuṣṭānāṃ dhūtaguṇadharāṇām agro nirdiṣṭaḥ. …punar aparaṃ : sarvaśrāvakānāṃ samakṣam ayaṃ Bhagavatārdhāsanenopanimantritaḥ.

[61]『増壹阿含』、大正.2, p.663b7-8,『須摩提女經』、大正.2, p.841a20,『佛説給孤長者女得度因縁經』、大正.2, p.848a11.

ガンダーラ地方はクシャーナ王朝の統治下で、説一切有部の中心地であったとされる[62]。

クシャーナ王朝末期のタキシラ地方で編集された有部系の布教文学とみられている[63]『大莊嚴論經』にも、次のような言及が見られる。

> 我昔曾聞。尊者摩訶迦葉。入諸禪定解脱三昧。欲使修福衆生下善種子獲福無量。於其晨朝著佛所與僧伽梨衣。而往乞食。時有覩者。即説偈言　讚歎彼勝者　著於如來衣　人天八部前　佛分座令坐[64]

また婆須蜜(Vasmitra, 世友)による『尊婆須蜜菩薩所集論』では、仏陀が彼に座を譲られた理由に４種を挙げ、その第一の理由に

> 是謂。彼時。以何等世尊請摩訶迦葉與半座坐。或作是説。時諸比丘輕易迦葉起染汚心。不知迦葉入大法要。以是故世尊與半座坐。欲使比丘心開意解。懼獲不善報[65]。

と説かれている。これは、『雑阿含』や『別譯』の所説を前提にした解釈といえる。婆須蜜とその著作、また彼の帰属部派などについては複雑であるが[66]、この論書は有部系の文献と考えられている[67]。

---

(62) 岩本裕『改訂増補　佛教説話研究序説』、佛教説話研究第 1 巻、開明書院、東京、1978 年、93 頁。

(63) 静谷前掲書、128-129 頁）。

(64)『大莊嚴論經』、大正.4, p.310bb27.

(65) 大正.28, p.762a12-15

(66) 山田龍城『大乗佛教成立論序説』、平楽寺書店、京都、1959 年、391-416 頁。

(67) 小野玄妙・丸山孝雄編『佛書解説大辭典』、第 7 巻、大東出版社、東京、

この他、伝承部派が明らかでない文献にも、こうした伝承素材を伝えるものがある。たとえば、先にも見た『増壹阿含』である。この阿含経では、スマーガター伝説以外の部分でも言及が見られる。そこでは、第一結集の時、大迦葉が阿難に四部阿含を後世に伝えるよう委託したことに対し、阿難が、仏陀から座の半分を譲られた大迦葉こそ適任であると答えたことを伝えている(68)。またこの阿含経の註釈である『分別功徳論』にも言及が見られる(69)。『増壹阿含』は、帰属部派を不明とされているが(70)、経の中には、有部の所伝と共通するものが存在することも明らかにされている(71)。『大智度論』の場合もこれと同様の状況で、この伝承素材の他にも有部の所伝と共通するものを伝えている(72)。よって、これらは、有部の影響を受けている可能性が強い。また部派との関係が明らかでない『迦葉赴佛般涅槃經』、『衆經撰雜譬喩』、『大法鼓經』、『佛説華手經』(73)など

1978 年、109 頁。

(68) 大正.2, p.549c3.

(69) 大正.25, p.31b17.

(70) 平岡聡「『増一阿含經』の成立解明に向けて(2)」、『印度學佛教學研究』、第 57 巻第 1 号、312-319 頁。

(71) 平岡聡「『増一阿含經』の成立解明に向けて(1)」、『印度學佛教學研究』、第 56 巻第 1 号、298-305 頁。

(72)『大智度論』、大正.25, p.354c16-17.これ以外にも、本論が有部系にのみ見られる伝承素材を伝えている点が指摘されている(拙稿「『中本起經』における説話伝承の系統について-「佛食馬麥品」を中心に-」、『仏教学セミナー』、第 89 号、41 頁)。

(73)『迦葉赴佛般涅槃經』、大正.12, p.1115b4-6,『衆經撰雜譬喩』、大正.4, p.542b13-c12,『大莊嚴論經』、大正.4, p.310bb27,『大法鼓經』、大正.9, p.291c23-24, 298b2-3,『佛説華手經』、大正.16, p.127b23-24,128a28.

でも、この伝承素材が説かれている。いずれにせよ、A 伝承及び、この伝承素材が、註釈文献を含めて全くパーリ文献には見出されず[74]、また大衆部系の仏伝的記事を伝える *MV* にも見られない点を考えれば、A 伝承とその伝承素材は、有部を中心に成立したものである可能性が高いといえよう。

むすび

以上、「大迦葉品」に説かれる説話と、そこで説かれる大迦葉が仏陀から座の半分を譲られたという伝承素材に焦点を当てて、本説話の部派的伝承系統を考察した。その結果、「大迦葉品」は、有部の説話伝承を背景に成立したものと思われる。このことは「佛食馬麥品」の結果とも相応する。現時点では、全ての品を考察したわけではないので、『中本起經』が有部に属するとは速断できないが、少なくとも、『中本起經』が部分的に有部の説話伝承を受けて成り立っていることは指摘できるだろう。今後、残る品にも考察を加えて、『中本起經』の成立背景を明らかにしたいと考える。

---

(74) 岩井昌悟「「半座を分かつ」伝承について」、『中央学術研究所紀要』、個別研究篇 I, No.9, 2004 年、164-167 頁。

【引用文獻】

「阿育王經」、『大正新脩大藏經』、第 50 卷。

「阿育王傳」、『大正新脩大藏經』、第 50 卷。

「阿毘達磨順正理論」、『大正新脩大藏經』、第 29 卷。

「迦葉赴佛般涅槃經」、『大正新脩大藏經』、第 12 卷。

「過去現在因緣經」、『大正新脩大藏經』、第 4 卷。

「俱舍論」、『大正新脩大藏經』、第 29 卷。

「賢愚經」、『大正新脩大藏經』、第 4 卷。

「根本説一切有部苾芻尼毘奈耶」、『大正新脩大藏經』、第 22 卷。

「根本説一切有部毘奈耶藥事」、『大正新脩大藏經』、第 22 卷。

「薩婆多毘尼毘婆沙」、『大正新脩大藏經』、第 22 卷。

「薩婆多部毘尼摩得勒伽」、『大正新脩大藏經』、第 22 卷。

「座禪三昧經」、『大正新脩大藏經』、第 15 卷。

「四分律」、『大正新脩大藏經』、第 22 卷。

「十誦律」、『大正新脩大藏經』、第 22 卷。

「正法念處經」、『大正新脩大藏經』、第 17 卷。

「衆經撰雜譬喻」、『大正新脩大藏經』、第 4 卷。

「尊婆須蜜菩薩所集論」、『大正新脩大藏經』、第 28 卷。

「須摩提女經」、『大正新脩大藏經』、第 1 卷。

「雜阿含經」、『大正新脩大藏經』、第 1 卷。

「增壹阿含經」、『大正新脩大藏經』、第 1 卷。

「大莊嚴論經」、『大正新脩大藏經』、第 4 卷。

「大乘集菩薩學論』、『大正新脩大藏經』、第 32 卷。

「大智度論」、『大正新脩大藏經』、第 25 巻。
「大般涅槃經」（40 巻本）、『大正新脩大藏經』、第 12 巻。
「大般涅槃經」（36 巻本）、『大正新脩大藏經』、第 12 巻。
「大法鼓經」、『大正新脩大藏經』、第 9 巻。
「大寶積經」、『大正新脩大藏經』、第 11 巻。
「中阿含經」、『大正新脩大藏經』、第 1 巻。
「中本起經」、『大正新脩大藏經』、第 4 巻。
「鞞婆沙論」、『大正新脩大藏經』、第 28 巻。
「父子合集經』、『大正新脩大藏經』、第 11 巻。
「分別功德論」、『大正新脩大藏經』、第 25 巻。
「佛所行讃」、『大正新脩大藏經』、第 4 巻。
「佛説給孤長者女得度因縁經」、『大正新脩大藏經』、第 1 巻。
「佛説華手經」、『大正新脩大藏經』、第 16 巻。
「佛説頂生王因縁經」、『大正新脩大藏經』、第 4 巻。
「佛説頂生王故事經」、『大正新脩大藏經』、第 1 巻。
「佛説文陀竭王經」、『大正新脩大藏經』、第 1 巻。
「佛本行經」、『大正新脩大藏經』、第 4 巻。
「佛本行集經」、『大正新脩大藏經』、第 4 巻。
「別譯雜阿含經」、『大正新脩大藏經』、第 1 巻。
「摩訶僧祇律」、『大正新脩大藏經』、第 22 巻。
「彌沙塞部和醯五分律」、『大正新脩大藏經』、第 22 巻。
「六度集經」、『大正新脩大藏經』、第 3 巻。
以上の漢訳仏教典籍は、大藏經テキストデータベース研究会制作の

テキストデータベースを利用した。

Abhidharma-koṣa-bhāsya, Abhidharma-koṣa-bhāsya of Vasubandhu, ed, by Pradhan, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1967.

Bhaiṣajya-vastu, Gilgit Manuscripts, III, part. 1, Bibliotheca Indo-Buddhica No.16, ed. by Dr. Nalinaksha Dutt Ph. D., Sri Satguru Publications, Delhi, 1984.

Divyāvadāna, *The Divyāvadāna : a collection of early Buddhist legends*, by E.B. Cowell and R.A. Neil, Cambridge University Press, Cambridge, 1886.

Mahākaṇha-jātaka, The Jātaka, iv, ed. by V.Fausböll, the Pali Text Society, Oxford, 1991.

Mahākkhandhaka, The Vinaya piṭakaṃ, vol.i, ed. by Hermann Oldenberg, the Pali Text Society, London, 1969.

Mahāvastu, Le Mahāvastu, vol.iii, ed.by É. Senart, Meicho Fukyu–kai, Tokyo, 1977.

Sāratthappakāsinī, vol.ii, ed. by F.L. Woodward, the Pali Text Society, London, 1977.

Sumāgadhāvadāna, 岩本裕『スマーガター＝アヴァダーナ研究』、佛教説話研究第 5 巻、開明書院、東京、1979 年、付録 I

【主要参考文献】

岩井昌悟

[2004] 「「半座を分かつ」伝承について」、『中央学術研究所紀要』、個別研究篇 I, No.9, 141-172 頁。

岩本裕

[1978] 『改訂増補　佛教説話研究序説』、佛教説話研究第 1 巻、開

明書院、東京。

[1979] 『スマーガター＝アヴァダーナ研究』、佛教説話研究第 5 巻、開明書院、東京。

榎本文雄

[1980] 「Udānavarga 諸本と雑阿含経、別訳雑阿含経、中阿含経の部派帰属」、『印度学仏教学研究』第 28 巻第 2 号、931-933 頁。

[1984] 「阿含経典の成立」、『東洋学術研究』、第 23 巻第 1 号、102 頁。

[1991] 「初期仏教思想の生成―北伝阿含の成立」、『岩波講座・東洋思想　インド仏教Ⅰ』、第 8 巻、岩波書店、東京、104-110 頁。

[1998] 「「根本説一切有部」と「説一切有部」」、『印度學佛教學研究』、第 47 巻、第 1 号、392-400 頁、

[2001] 「『雑阿含経』の訳出と原典の由来」、『石上善應教授古稀記念論文集　仏教文化の基調と展開』、山喜房佛書林、東京、31-32 頁。

[2004] 「「根本説一切有部」の登場」、『神子上恵生教授頌寿記念論集インド哲学仏教思想論集』、永田文昌堂、京都、651-677 頁。

岡野潔

[1990] 「ラリタヴィスタラ原型の追加部分・普曜経巻八について」、『宗教研究』、第 283 号、140 頁。

[1991] 「ブッダチャリタの改作仏伝について―仏本行集経と方広大荘厳経に用いられた未知の仏伝」『東北大学印度学講座六十五周年記念論集　インド思想における人間観』、平楽寺書店、京都、55-77 頁。

奥村浩基

[2009] 「『中本起經』における説話伝承の系統について-「佛食馬麥品」を中心に-」、『仏教学セミナー』、第 89 号、1-21 頁。

小野玄妙・丸山孝雄編

[1978] 『佛書解説大辭典』、第 7 巻、大東出版社、東京。

静谷正雄

[1978] 『小乗仏教史の研究』、百華苑、京都。

平岡聡

[2002] 『説話の考古学 インド仏教説話に秘められた思想』、大蔵出版、東京。

[2003] 「『雜阿含経』と説一切有部の律蔵」、『印度學佛教學研究』、第 51 巻、第 2 号、813-818 頁。

[2007] 「『增一阿含經』の成立解明に向けて（1）」、『印度學佛教學研究』、第 56 巻第 1 号、298-305 頁。

[2008] 「『增一阿含經』の成立解明に向けて(2)」、『印度學佛教學研究』、第 57 巻第 1 号、312-319 頁。

長崎法潤

[2004] 「雜阿含経解題」、『新国訳大蔵経　阿含部Ⅰ』、大蔵出版、東京。

平川彰

[1986] 『インド仏教史　上巻』、春秋社、東京。

[1997] 『初期大乗仏教の研究 I』、平川彰著作集第 3 巻、春秋社、東京。

舟橋一哉

[1987] 『倶舎論の原典解明　業品』、法蔵館、京都。

松村恒

[1996] 「聖典分類形式としてのアヴァダーナの語義」、『今西順吉教授還暦記念論集　インド思想と仏教文化』春秋社、東京、683-685 頁。

松村恒・松村淳子

[1994] 「アショーカ王伝の構成と材源」、『神戸国際大学紀要』、第 47 号、29-35 頁。

水野弘元

[1970] 「『別譯雑阿含経』について」、『印度学仏教学研究』第 18 巻第 2 号、1970 年、41-51 頁。

[1988] 「『雑阿含経』の研究と出版」、『仏教研究』第 17 巻、1988 年、国際仏教徒協会、41-51 頁。

[1997] 『水野弘元著作集第 1 巻　仏教文献研究 I』、春秋社、東京。

向井亮

[1985] 「『瑜伽師地論』摂事分と『雑阿含経』」『北海道大学文学部紀要』33 巻、1985 年、1-41 頁。

森章司・本澤綱夫

[2004] 「摩訶迦葉（*Mahākassapa*）の研究」、『中央学術研究所紀要』、個別研究篇 I, No.9, 1-140 頁。

八尾央

[2007] 「「根本説一切有部」という名称について」、『印度學佛教學研究』、第 55 巻、第 2 号、894-897 頁。

山田龍城

[1959] 『大乗佛教成立論序説』、平楽寺書店、京都。

Hiraoka Satoshi.

[2007] "The Sectarian Affiliation of Two Chinese Saṃyuktāgamas," *Journal of Indian and Buddhist Studies*, No.49-1, pp.1-7.

Schimithausen, L.

[1987] "Beiträge zur Schulzugehörigkeit und Textgeschichte kanonischer und postkanonischer buddhistischer Materialien", Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hinayana-Literatur, ed. H. Bechert, Vol. 2, Göttingen, pp,304-403.

A sectarian system of the legend in the *Da jia xie shi lai pin* of the *Zhong ben qi jing* (2)

—the study of the *Da jia xie shi lai pin*

Hiroki Okumura*

Abstract

The *Zhong ben qi jing* is one of the Buddha's biographies translated in Chinese, but nobody studied the sectarian system of the legend in the the *Zhong ben qi jing*. In this paper, I made clear this problem. As a result, I point out that the story in the *Da jia xie shi lai pin* belong to Sarvāsitivāda-tradition.

Key words : *Zhong ben qi jing*, *Da jia xie shi lai pin*, Sarvāstivādin.

* Department of Religious Studies, Fo Guang University